# 迎説義市手錄 三編 全

へ遠 13
1277
13

1279
13

村田

# 近世説美少年録第三輯巻之三

東都　曲亭主人編次

## 第二十五回

訟を聽て順政賊情を知る
姻を陳く落葉恩赦を乞ふ

再説。安保箭五郎直幻。奥ゑと朱之介を細引。後輿に乗せ一人を備ふ。早くも立野の陣所へとて行くべくふ。より里長にも告知らせぞ。又四下郷近里人ゆ。その趣を告ぐ。

しかるに和解られて。絆の障りふるのやせんと。豫く思ひよりそこの時大和の國主。

ける。陽舜坊順政。栄舜坊順政の婿子。一順政に順ふ作る。彼此言吏の邪正。民の愁訴を知らん為。

封内を巡廻して。且く立野の陣所に在りあるを越年せ。れ。ゆ。前五郎が件の訴を遂

く本城に走くを及ぶを。躯て陣所へ行て見る。絆恁と。穿えあげる。然程に國守順政

い。その日民の訴を聽果て。退くとせられ。折有司又前五郎が禀を一一。箇様々と告

るにより程なく同注所に著坐あり。雑兵をもて笹前五郎を坪の内へ召入れさせて訴訟をと
尋らる。登時笹前五郎は索を合つめて坪の内へ朱之介と奥手をも共侶に牽入れつ、找て對ひ
額をつけて姓名を告よしを述て懐にしたりける訴書をとり出せるを一個の有司受とりて高
やかに讀ければ順政ゆくりなく聴て、さりとは笹前五郎、汝は何者の好ありて朱之介を留措たる。抑
これは何処のものぞと問れて笹前五郎頭を擡させ、這朱之介は武蔵より来つる旅客にて在下
こそ交遊の好あるをもて宿所に留措候ひしに、荊婦奥手と密通せる縡既に分明なりしかば、郎
等ら奴们が密会の折を覘ひ挫で、形のごとくに捆め、此彼倶に推禁して、聊も罪を果さん輙
けれども、守の処に申しまをさで私に罪なへ明らかにし、地に訴まうして御刑伐を願ふのみ。這奴
らが頭を刎るへかりしを、怨を釋させ給へと稟まをす。順政うち聞て、又朱之介と奥手に對ひて
今笹前五郎が稟せし如く汝等は密通せるにや。素より相違あらずや、と問ひて差ずる朱
之介は早くも苔難しらしを、奥手は阿容る気色もなく、膝を找めて申さく、御諚にては

候へども賤妾は素より朱之介と不軌せしことはあらず。良人は今朝も平城の方に所要あり
とて出でしに、見る婢们は物買に出たる隙に、朱之介が賤妾を拘へて挑みて聴ざれば縊り殺さんといひ
しに術もなく、有繋に命の惜ければ、僅にその意に任しつる。折から良人のかへり来て縛の
恥に及べるのみ。一旦他に従ひしは実情ならねど、その情由を證据なく、会ある
良人に知られて怒の烈しかりしかば、いひとくとも聴れはせで、とかくその縛を受て口を鉗をりし。
このをり一時の怒りに任して倶に憎しと思ふとも、年来賤妾が心操は笹前五郎もよく
知るべし。乳母にも優るべき慈悲のもて、この義を資させ給へかし、と人の膝に側らぐ朱之
介は驚くまで浅ましと思ひて只見て順政は又笹前五郎にうち對ひて、只今奥手がいふ
陳ぜしよしを汝も具に聞つらん、思ひあたることやある、と問れて笹前五郎頭を傾け、嘗て奥手が
稟せし如く他は年来操正しく、貳心あるべきものにあらねど、朱之介にいひよられて、強姦せ
られたりける歟、その義は覚期し仕らず。この遵守の御威勢にて朱之介を問せ給はば、虚実定るべし

ひとしへ。ひらそと順政ぬし。領ぬう佶とそうそそ。それ朱之介汝ハ一時のかゝ来心めと理うく
奥方を犯せ。狡此も隠まぐ首伏せよ。あの期ハ及て詭飾らぐ骨を拗ぐ実を吐せん。有
つ。伏れ亦さぐそと堅く向れ朱之介ハ。ぐを嗟嘆ハ。跪ぐく亦さ。仰ぐ日ぐり
ひひぬ。奥方ハそのあくろう。在下と相欲びて。後ざりをとまうをとも。既ま枕を並べ。五十歩
逃ぐ百歩をとそ。諸ハも似ぐぐ。何の方ハも密通の悪名月雪めぐるべ。然ばとて。操
正しを。誉らく他妻を。這身と倶ま罪ぐれる。是ハとれ不便のハ。狡ぐとて。願ぐを義の
ひを在下が盤纏の為ハのそ来ぐる。沙金三百両ハ。ぐ箭五郎の宿所ぐあり。この金をみを箭
五郎ハ贈ぐて。罪を贖ぐ。操正ぐを奥方ハ。在下ハ亦罪をを免れて。他郷へ赴くとぐべ。
いぐでの義を。笠前五郎ハ。御教諭あって。納ぬせられ。ぐを守の。ぐ慈悲ぐ。ハ。ぐ管願ひ
なると。ぐを入りつまうまうぐ。順政ぬし。領ぐく。笠前五郎彼を。ぐる狡朱之介ハ。貯蔵ぬ。金
三百餘両をと。汝ハ納て。身の罪を。贖んを願ぐ。甚麼ぐの義を。見ぐを。ぐ。箭五郎



ぐぐも。今ぐ天ぐり。額をつぐを。有ぐぐぐを。原ぐを。御説を。義ぐハ。ハ。ぐを。世ハ男子ぐを。
ぐのぐ妻を。強姦せられ。ハ。ぐ忍ぐぐを。情由ぐれも。朱之介ハ。ぐの。ぐ。ハ。ぐを。悔てみぐぐ。新まをを。
沙金三百餘両を納て。罪を贖んとまうハを。ぐ。ぐ。執念深ぐを。ぐ。守のぐを。ぐ。ぐ。ハ。ぐ。
似ぐぐぐもやぐぐぐぐ。ぐの義ハ。相違ぐを。ぐぐぐぐ。ぐぐぐぐ。ぐぐぐぐ。ぐぐぐぐ。ぐぐぐぐ。ぐぐぐぐ。
ぐぐぐぐ。ぐぐぐぐ。ぐぐぐぐ。ぐぐぐぐ。ぐぐぐぐ。ぐぐぐぐ。ぐぐぐぐ。ぐぐぐぐ。ぐぐぐぐ。ぐぐぐぐ。
ぐぐぐぐ。ぐぐぐぐ。ぐぐぐぐ。ぐぐぐぐ。ぐぐぐぐ。ぐぐぐぐ。ぐぐぐぐ。ぐぐぐぐ。ぐぐぐぐ。ぐぐぐぐ。
ぐぐぐぐ。ぐぐぐぐ。ぐぐぐぐ。ぐぐぐぐ。ぐぐぐぐ。ぐぐぐぐ。ぐぐぐぐ。ぐぐぐぐ。ぐぐぐぐ。ぐぐぐぐ。
ぐぐぐぐ。ぐぐぐぐ。ぐぐぐぐ。ぐぐぐぐ。ぐぐぐぐ。ぐぐぐぐ。ぐぐぐぐ。ぐぐぐぐ。ぐぐぐぐ。ぐぐぐぐ。
ぐぐぐぐ。ぐぐぐぐ。ぐぐぐぐ。ぐぐぐぐ。ぐぐぐぐ。ぐぐぐぐ。ぐぐぐぐ。ぐぐぐぐ。ぐぐぐぐ。ぐぐぐぐ。
ぐぐぐぐ。ぐぐぐぐ。ぐぐぐぐ。ぐぐぐぐ。ぐぐぐぐ。ぐぐぐぐ。ぐぐぐぐ。ぐぐぐぐ。ぐぐぐぐ。ぐぐぐぐ。
ぐぐぐぐ。ぐぐぐぐ。ぐぐぐぐ。ぐぐぐぐ。ぐぐぐぐ。ぐぐぐぐ。ぐぐぐぐ。ぐぐぐぐ。ぐぐぐぐ。ぐぐぐぐ。
ぐぐぐぐ。ぐぐぐぐ。ぐぐぐぐ。ぐぐぐぐ。ぐぐぐぐ。ぐぐぐぐ。ぐぐぐぐ。ぐぐぐぐ。ぐぐぐぐ。ぐぐぐぐ。
ぐぐぐぐ。ぐぐぐぐ。ぐぐぐぐ。ぐぐぐぐ。ぐぐぐぐ。ぐぐぐぐ。ぐぐぐぐ。ぐぐぐぐ。ぐぐぐぐ。ぐぐぐぐ。

引入れて賭を吉又托てその財宝を許多掠奪るゝ。復四郎が親加賀四郎が秘訣よりて。
その夏初て管を立て因て汝を捕へ糾問せんと忍折ゝ汝の密夫と訴出てみづから縛まる
やうに且那一義を図らず。その訴を聴試まその情夫婦糊賊也。朱之介が所持れ汝
金を奪ん為よ妻の奥ゝ密通させめるべ。有徒が這朱之介を良ゝ取扱ひ引入
れてその銭財を掠奪り送まる金をもみな奪ふく追出さんと計較る彼れも亦知るべく
も今飽まで歐懲さぶらふ。とその実を吐く。管を當くらせと辞烈く下知せられる。
雑兵仁の美りゆと応ず。前五郎を推伏せ登蒐り。管を揚ゝ三三十背をゝ歐
ゝ。管前五郎が皮破れ鮮血流ゝ苦痛る堪ず絶もちべ死声あり。ちゝ。
管を放ゝ。と叫べば雑兵を止め。掖起て推居ゝ。當下管前五郎。ゆ。
いて跪ゝ稟ゝ。守の御明察ふ違ゝ。朱之介が盤纏をヨク。とる旅客ゝ。
渡ゝ。交り。遂ふ宿所ふ留措ゝ。ゝ良ゝ技を薦めゝ。その金を奪ゝ。敵



ゝ足ゝ故ゝ。那復四郎も引入れ。箇様ゝ敷ゝ。又彼者の有財ゝ。
入ゝ。胸筆用の外ふ。張公酒ゝ喫れ。水子公も酔ゝ。ゝ。
れば縛の初ゝ。女房奥ゝ。諜合て色ゝ。朱之介ゝ。留れが疑ゝ。奥ゝ。
亦朱之介が美少年ゝ。辞ゝ。欲待れが朱之介ゝ。惑ゝ。財宝ゝ。
擲ゝ。あれども用送せ。沙金ゝ。二百両ゝ。それをも畧んと計ゝ。復四郎が
来ゝ。ゝ。那技ゝ。奪ゝ。他ゝ。奥ゝ。密會ゝ。折ゝ。捕ゝ。奪ゝ。
他ゝ金ゝ。見ゝ。夏ゝ。人情ゝ。大宅沙汰ふ。ゝ。他ゝ。那沙金ゝ。罪ゝ。贖ゝ。
欲ゝ。ゝ。剛ゝ。ゝ。所ゝ。紛ゝ。訴ゝ。及ゝ。追ゝ。
と深念ゝ。里長ゝ。知ゝ。御陣所ゝ。ゝ。申斐ふ。豫て。計ゝ。胸ふ。差ゝ。朱
之介ゝ。那沙金ゝ。罪ゝ。贖ゝ。願ゝ。既ふ十二分ゝ。欲ゝ。金ゝ。奪ゝ。追ゝ。
思ゝ。そ。明ゝ。晨ゝ。境ふ。ゝ。憲断也。仮価ゝ。ゝ。察ゝ。贖ゝ。尾

加賀四郎が許によりて良く抜ぎしをさへ発覚しを知ざりけるこそ愚なれ。その罪萬死に
當るといへども。大慈大悲の大御心にて。恩赦の御沙汰ありけるは、さながら死を新にして良民と為れ
ん。と思ふをもて遂に宥て。役価を首伏させける。頒政まうち寄て。有徳が夫婦斟合ひて許して
よりは笹前五郎が既にして首伏させれば重く奥手を責るに及ばず。且病坊なる里長と故老の里人
们を召捕よとて猛に雑兵们に下知ありしに那裡の里長里人们は笹前五郎が云云の情由を知
さぞ女房奥手と密夫を細めて立野の陣所へ牽もて行きしを。後に聞て皆驚きて係する者のあ
ときは里長と四隣の者が必且扱ふて然でも和談の整はざれば守へ訴られるがならべての里の恒例
なるを那人一時の怒りに乗じて人も告もせず許せずに短慮の至り是非に及ばず遠く追留
んとて里長里人共侶に迹を慕ふて立野なる陣所まで来にけるを。知るものありて箇様々々と
這時吩えあげしかば頒政則里長と故老の者を召よせて。笹前五郎が罪戻の趣を候々と説
示して這笹前五郎が宿所には朱之介が沙金三百餘両と三尾復西郎を欺詐りて掠奪せる



銭財の使用残れるもあらん。そを汝们に預るぞ。迭代に渠が宿所を成て失ふことなかれと
厳に下知せられしを。衆皆齊一言承りて家路を投て退りけり。有徳は又頒政ぬしに雑兵
们に件るえさして且笹前五郎と奥手をも獄舎に遣し繋ぎせて。拘送されてつねに朱之
介をつくづくて汝は武蔵の旅人といへど何の郷の人氏とふことも詳に報げず。原是何の所用
ありて這地に来て逗留しつる。且沙金は本州にて通用せざるものなるに許ヨヌ齎しつる不審
なり。その身の素生と沙金の来歴その餘の事も具に訴せよ。と詰問るる。朱之介は
困じ果て跪ひて陳ずるやう。那沙金は来歴あり。這身の素生も疑しきものにはあらねども
憚るよしあれば明々地には訴しがたし。その義は許させ給へかしといへども果ず順政ぬしは眼を
瞋らし声苛立て沙金の由来もその身の素生も隠すは不正の情由あらんかし。おもふに汝は
盗賊欸ならずば必敵国の間諜者にてあらんずらん。鞭撻拷して首伏させよと敦圉き
悍く下知せしを。有司们霎時と推禁めておそるおそる諫めけり。日ならで這罪

人の譴責ハけふのミに限るべからず。生平にも倍して時ゝまで訟を聴しめされしかバ御庶民もさて
あらん今宵ハ獄舎へ遣して。後日に御詮議あるべきのミならんと頻に願ひ奉ると稟しも順政主
是によりて然らバ彼奴も禁獄せよ。その餘のものハ悠々と叮寧に宣旋て。その日の聴ハ果にけり。
然程に笹前五郎夫婦と朱之介が。立野の獄舎に繋れるを。隣の風声に隠れなく。やがて上
市の郷へ聞えしかバ。斧柄ハ駭きつゝ歎きつゝ。とにかくに難く母に告つ。咱們天の禁獄せられしと
ふ風声を聞ものハ。欲あれバとてかまでまめしうならん甲斐もなく。武蔵ハかねて安保に倡引れけん。
彼人許に潜居て。又禍を醸して。その身の破滅に及びしハ自業自得といふべきものなれ
ども妹と伕の縁しを結び。恩義をおもへバ能ハずとも救ひてこそ人なる道に缺ざる作麼何と
もなくよらんやと。同しも目を押拭へバ。落葉ハ傍に頷きて。然なり那人の風声ハ吾儕も詳に
聞えれバ浅ましさる限りもあらず。左さまに右さまに尋思しつ。救んとぞおもふなれ。現彼人の為情
なる。慾の為にその身の安危も思ハぬ悪島苛の自物なりしとても。一旦の恩義に感じてやおもく

伱と妻あハせしからにてや人を知らざりし。吾儕の浅慮なる。その落命笹前五郎と云ひ奥さまと
お睹の寄る方へ目子もよるならひにて。世間に入たる人ハ稀ならずとか。いへども人の不実を
怨みて仇のおもひを為さバ共に不実の人となりて。人の心にあれかしまれ。今一回救んと思ひかけしかバ
とある宿禰なる里正刀祢と故老達にうち相譚つ。願書を立野の御陣にのぼさまらせて命乞を
せんとするに准備太く整ふ。程ハ夙早て立野へ参りて恩赦を願ひまをさん。心がらでも人ハ
又命運によるものと。彼ハへバ果敢なきことをおもひ屈して病る煩ひなるものと。慰めらるれて又稽滞
らも斧柄ハいとど胸苦しくも。有恁る時なら脱落なく雄々しきも親の計ひ且感じ且
歎びつ。又ひとりも居らざりけり。有恁而その詰朝落葉ハ里の故老們に伴ひて立野の陣
所に赴きつ。杈同注所に告訴して。縁由を稟まをすに這回禁獄せられたる朱之介ハ落葉
が旧縁あるものにして。武蔵の河踰よりまゐりけれバ。逆宿所に留め置く。女児斧柄を妻
にせしに。又他が齎したる沙金如千両ハ河踰に施主として。如如来禅師を請まつりて佛像

あまさつて
許多造らんと。暴裏ふ朱之介が這地ふ来つる。便りふ就く件の金を。奪せよ。ゆえ
ども禅師の菴まで。ゆえねば。又いふとも。せん術なき。一とさび河踊へ立つのてよりて件の施主ふ
報で。沙金を返えんとふまよりの。その意を任して起りせ。ふ笹前五郎が悪巧を。窃に路
生き抑留め。さぐる誘へく。宿所を藏措あと。世の風声を。伺ふ他が悪友を倡引とく。
暗くふ身を暗くふ良くふ技ふ耽りくる。その罪免れぐて。伯れど。急少年の思慮浅く。
仮価の弥を被られけんと。れも。亦不便ふ。出処正しくふ。ふ落葉が女婿で。伯るよりの里
正と初とて。里人ども皆知れ。と。証人とて願ふ。まつるめ。恩赦の御沙汰とて。朱
之介が禁獄を免ぜ。とねぐふと。両三回ふ及びけ。かくて又落葉ふ獄舎日毎々々ふ食
物を餽遣へ。恩免を願ふ。その趣い慈々と密ふ。その
後素生を責問れ。と。落葉が。そのげくて。招道ふ及びぐ。ふ疑ひ解けく。
原来盗賊ふ。あらぐ敵くふ間諜者ふ。あらぐりけと。定められて。その罪軽くなりけり。

有慈而又笹前五郎奥ふも。呵責と。喜て。その餘の悪党を。同れ。ども。郷ふ朱之介と
復四郎を。引れて。賭と。吉又とせ。外ふ。犯くるとあらぐとの。彼車野の前阪ふ。乃介坊
二郎を射て殺くるとらの。吉又ふ知きる人るく。笹前五郎も。朱之介も。死を極めて。のがれけ。
竟ふ。その露れ。然れども。笹前五郎。その悪党騙賊ふ等一首ふ刎べと。設せられ。ふ
順政ふの母者の病く。久くく。痩りの。ふ。その比重らせ。ぬ。と。封内ふ赦を。行れて。五逆と。人を
殺せ。ふ。追放せ。と。下知せる。これふより。笹前五郎も。猛ふ。死刑を。宥められ。他が家財を
籍く。沙金三百餘両と。朱之介が行衣腰刀。そが。仮落葉ふ賜ふ。この餘の銭財と。
家具衣裳ふ。ふ。くの。ふ。三尾加賀四郎ふ賜ふ。その損財を補せ。復四郎ふ。その慈を
外め。怠状を。そ。ふ。せ。女婿二名ふ。身の暇と取らせ。て。家ふ借屋ふ。その家
主ふ返賜ふ。扶三尾加賀四郎と。復四郎と。落葉ふ。比曽寺上市病坊ふ。里長と
里の故老を召聚。罪人恩赦と趣と。云云と。宣示へ。朱之介ふ。訓杖五十と。定められ。背戒

刑を寛くして国守恩を施す
出像第廿三


順政

れて鞭撻して。そが侭落葉に遁しぬる奥手も亦罰杖二十にして。その向後を懲されぬ。
笹刑五郎ハ笞の數一百敺れて奥手と倶に大和を追放せられけり。抑本州の守順政主ハその
先祖南都の寺家より発起て彼此を討靡け。その父順昭の時に至て大和一國を平均せし
かバ威勢鄰國に盛なり。然れどもその家門素より長袖なりけれバ戦國中には稀なる刑
罰を寛して。よく恩赦の沙汰ありよりて笹刑五郎朱之介等ハ再び首頭を續れて剃[illegible]
朱之介ハ障もなく。岳母落葉に遁与されけり。大赦ハ君子の不幸にして小人の幸なりと
より古人のいひけん以あることと識者ハ竊に評せしとぞ。間話休題。却説落葉ハ加賀四
郎等の後に跟て國守の恩を拝謝し。朱之介を受とりて退出て。軈て準備の箯輿に
乗して笞瘡を勤ら有里正里人とつれ立て上市の宿所にかへり来にけれバ斧柄ハ欽び出
迎て衆人を労ふ程に送り届し衆人ハ里正と共侶に歓びを述別を告て皆動揺々と
出て由けり。その夜落葉ハ斧柄と共に朱之介を勤りて奥なる子舎に休て湯液を与へ



るども朱之介ハ幸にして笞瘡ハ痛けれども面目なさに弱り果て。只その恩義を謝する
のミにかへらぬ斧柄ハさまざまと慰めて。夕膳を羞めする。曽待日ごろにかハらねバ朱之介ハ
いよいよ恥て。六の身を日影の雪にして消も失なんと思ひけり。有徒而その甲夜の間に落葉ハ朱
之介を召近つけて斧柄をも側に侍らせ且恩赦の歓びを演て四下をうかゞひて声を微めて扠
いふやう朱刀祢諫め甲斐もなかりし。再度の衍を今更に咎めて云云といふにハあらぬぞかし。凡人の
浮氣なる世の中もヨヌならぬことなれども。それにも大く品ありて汝が身の放蕩ハ筋ありて遷じて婦女壻
なれども女児の必死を拯れたる恩を忘れバ今一下び骨を折んと思ひて斧柄と倶に神に祈り仏を
念じて吉野の御陣へ秩田と共にまゐりて願ひまうせし誠届きて志ハ致して恥を見る性なり
ともされば懲ざる事ハあらぞその心をバ改めて信ある人となりぬるならバ汝が身一己の幸のミならで吾
倚母子の福ひならん。今又世よりもあれバ今茲一下稔幸防して氣なかくあらせよかし。されバ心
もとなきハかの乃仆無坊二と無らんのみなるにつけても件の両個の従者の往方を詳にせまほし

いふるゝ甚麽ぞや。と問詰らる。朱之介いたゞきて。
撞実の親も及ばぬかなさに。慈悲鍾愛骨に徹り膽に銘じて。有がたさ尽くて感
涙の外いはぬ。おのゝく行状。慎みて這洪恩を復命まつらんと。傍に武蔵へ
還らばやいかに。那悪友に説惑されて。あやまち禅師の帰菴を俟て。君命を達せば。間の事に
及んと思ひよりて。倡道されて。その奸計に陥りしは。俺ながら愚痴軽才。いかゝ面目なし。
目今諸れあしぬ。従者乃介と坊三郎は。あの折河踰へかへりて。その時の日状。如来禅師と
俟ふ。今に帰菴に居れば在下は来年まで。這地に逗留仕らん。安えあらば。教諭して注
進の為に遣はれたまへ。その義は在るとても。主君の外あるべからず。休れ。と実
直一本に聞れば。落葉に代りて領ぜず。あゝ〳〵あの安堵。今廿歳に成る。君の
れ申すを受ずとも。又あに在らず。額髪は似げもなく。外の人視も宜しからぬ。羽織袴は
剃除せず。大人ふるまひそとゝのへかくて宿命と果まで及びて武蔵へ還りの旨は復命



思はんとも。とゝ左も右も云べし。願はくは心を改めて。深信堅固の時節を俟ね。如如来さま
君命を達せざる共伴に畫を心も空しゝ。と諭さ誡るゝ木に落
葉は袖の露略されて斧柄いよ〳〵泣は立ち。慈悲と情義の両翰枝を折り苦しく悔かふ。黄
櫨ちりぬれば葉の朱之介。褐散るおりの不楽ふけの有徒而朱之介はその次の日に額髪を
剃て親を更命。是より杣木の宿所に落着。悲苦しとのゝ思ひも落葉毋に
誠心。漸々に化せれて。先非を悔て早晩に正首は立働く。斧柄も睦く。落葉の特
性に賢ぶる言語を慎む。役はかれども心ばえは閑雅も人なつこく。或は糸繻の出納小使銭の日記。
資けんば斧柄に。落葉さへ愛敬して今番は朱之介を
大く識り。里人も落葉斧柄の儔稀なる。慈善自実義理の賢に心操を倣ふ
感嘆せざるのこなれば朱之介も憎まぬ。五日と世俗のけんゆの人の噂も七十

善に與する人心流るゝ水の低きに就くと亦何ぞ異ならん。十室の邑にも忠信あり。義姑賢く
妻の世に有ること此誠心のよく一郷を感ぜしめつる。されど朱之介の非を遂ざりし。末の陶てぞうそけれ

## 第二十六回　金を齎して落葉女婿を遣る　唐布にかさねて晴賢義弟に遇ふ

却説光陰荏苒として是年も果敢なく暮て木芽若葉の春立ちて如月中浣に
なりにけり。朱之介は河踰の首尾も有繋に心にかゝりて獨竊に思ひ量るに這地の容子を問
せんとて僞て使を立られなば隷られずけり。乃介坊二ツを心ありしも不便なり。何ぞ吹合てかゝえん
やと腹に向ひ腰に答て分別もなく早暮春にも裏に東國を遁よりて西周の春を遊
べきに移稔とも合やはり武藏の音耗絶るゝ。それも以あるなれ。扇谷朝興ぬしハ山内の
管領と和睦して軍を合し士卒を鳩て相撲する北條氏と戦ふ事なく。その故に朱之
介がくハしく歸り来ざりし。安否を訪ふに暇なく。那造佛の一條ハ他に任して度外に
措て閑戦防禦する秘計を旋らし軍旅に他事なかりければ徳ハいとし知るよしもなかりし落
葉ハ一日朱之介を身邊へ招き近つけて我身ハまだ何事も如如来さまのこの春から山
より還りまして爪在菴なされてより五百侍ハきのふ得ゝゆゑつらく思すなん身の行状心ざる
き改りけん久しく候へ甲斐ありて禪師の帰菴ましはせねどもこの故もなるべく思ひ
深信をおこして東西整ひなバ御菴へ参りて君命を速許なしをおねで歸國すべかりし。
と言葉まで葉ハげに告るぞうち聞く朱之介ハそれとなくも當惑の胸安からぬ額を病して沈
吟ずること半晌ばかり更に頭を撞て云ふ欽ときはそれへ只悔らくハ這身の衛沙金を
布さへ喪ひしを今にも贖ふ術もなし使用残て二百餘両の沙金なりを齎して往て那
里へ参るとも東西を目録と合ざれば毛を吹て疵を求る事損ねなんそれか作麼何と
まそよろしきやと潜め見て不樂げなる顔ばせぐとうち目戍きてそれその故のなり侍らん。
吾侍りとて知らるゝごく媚あるゝの事はあまりに談合繳まりなれも侍らき財禄多くなる

待ねど倘其時に力を勠して。我身に本意を遂させなば。女婿宅母が義理立ず。斧柄が必死を極れる恩を忘れしものに似て。心裏恥かしき事なれど。田園を抵償に買れたる東西整へて進らせんと思ひて昨夜斧柄にも商量するにぞ。沙金の不足が三百両欽圓金にて換るときは百五十両にて整ふよし。あれらの事は豫てよりそれとなく人に尋て吾倚まゐらする為にてありされば沙金は其大和にて通用せざる財なれば京師までも出さずく兌替は整ひぬべし。とある人の誨侍りしに只その不便のみにて隔昨歳の極月那白布を韓櫃より出さして七分ちて苞になせられしかば吾倚は初て心てけるに他も唱も常に織る布なれあるで唐縣布を三布に裁も分たざれば那布も亦あらためて買取らるも東西になぜるをあれも沙金と共倶に京にて買ひ整ひてん那白布は裁分の二百匁で侍るなる通価なるふ唐縣布の本幅であるならば一百匁まで足りぬべし。其の價をもの好比ある人に尋ねしに大約は一反二千匁あまりで買るものぞと云れば侘れども彼うち合して百八九十両の

金なくては整へがたき東西にあらず。吾倚たる二百金の貯禄はあらざれど。這才覚に胸塞りて。何と歟せましと思ひ折から。今朝さらも里長刀祢の這裡の門過べきを過られたるを遽しく呼入れて猛に金の要用あり。女婿の出世の筋なれば借出しても質に田園を遣与さべし。百金ばかり欲く侍りと。密にこれを憑みしを長刀祢の兼引て男子も及ばぬ身のなま表裏なきは唱よくあれり。然までに気の毒なれど代へあはせて間を合せん唱們が金は皆山年貢を預りたる積金ではあれど暮月を違へず返しあらば田質の事は要なしと云に憑むくあれしかば一毎も胸は落ねども。さらば女婿を伴ひ来る宿所へまゐるべし。その折遣与なむ。とて不期を推して長刀祢は不壻刀祢はいふも身を日標に貸金の證文寫して候ぬ印章を押さ忘れなとて辞せんとく耳語きして。そが依出て由を思ひと侍れば金は整ひたる事をあら心の秘密を明て告るふ欲ぶ。朱之介は感涙坐に進むを覚えず恭しく額をつきて。過世のいかなる契や有けんかく迄

恙なき身の果報ぞあやしけれ。如如来禅師に見参して。君命を遂し了て帰
國して金をその遠からぬ返しまゐらせんとふを。落葉ハ吟にあへざるその金を五百ヶ日調へる這
囬の金を返されんとて取替て間を合せ浮するものハ侍らずや。斧柄が必死を探れる。
恩義の為まゐらする金にあれば返されずとも。恩をまーく思ふぞそこるのたまひ様あんぜ。
只深信を肝要なれと諭し示しハ。掌を鳴らして斧柄々々と呼近づけて。昨夜話せし
多きより五百倆ハ目今里長刀祢の宿所へ置てんぞ。葛籠なる衣物出して斧
柄ハ夜ふろく取出しつきて来あらずる。織小袖の縮緬太織ハ名のみ痩宍に帯の端
さへあまりある真と辛苦を為にし表衣ぞと脱更て縫目の袖白踏皮も水入がる
親子中脱し旧衣畳む間に鼻紙折て懐へこれと遮与ふる印章を取て藏む袖
頭巾引提て朱刀祢たのむぞや。斧柄留守をよろしく背門より出かけり。是より斧
柄ものそしくなりて洛上への良人の為に笠の紐さへ脚絆さへや縫果て揃措く用意も



色々交し松の操や松葉茶の夏織絹の長財布その餘ハ杖よ草鞋など婢妾們等
共侶に東西の旅程しもあれ。落葉ハやくやかへり来て。朱刀祢斧柄も欣びの那一
種ハまた入りあは来女細ハ後に辛度やとふかきさてそと朱之介斧柄も俱に慰めて汲て薦
る一柄杓立茶の泡のあはれげに恩義の為に使するに親さへ子さへ暇なき心盡しを心ある人は
見るもたゞ津の國にありとふなる武庫の山の堺に栄ある空華の散りぞ去いなば入相の山寺の
鐘音聞れて。燈点し比にあるけの然程にその夜さり落葉ハ女婢們を遠ざけて朱之
介と斧柄をも側に招き侍らして。けふ借たる金百両と貯禄の金百両を
合して朱之介に遮与しても。御前にもよし這二百金ハ鷹を捉山めて斧柄が必
死を救れる報恩の為に進らする。是をもて洛に上りて足らぬ沙金を百反の寄帰布を
買取て如如来さまへお使をなさて勤めよかし。五百倆が去歳より預けてある沙金を
廿一包あり。十両包と覚れば不足ハ廿九包なるべし。それに布の價をも加えても十五六金残は

べし京師までの路費あれバ。たくはへの没るまでなれバ。さりとも沙金および唐布なども時價の高下あるべけれバ。ヨシヤそれとても其時ハ不便の事もあらん。其不足を補ふ貯財のあれバ。後悔せん皆それぞれよろしくあれ。それのミにもあらねども。京師ハ色の世界なれバ目に觸るゝもの皆愛らしく耳に聴もの美ならざるハなし。始め盛言めく宿遊女の圏套に入らんと念ひあへり。倦ハバ去人のなきさへあらぬに引出さく窮るに似されども。おん身の爹々公木偶人形も都かふるの折から意のまゝならぬ。駒の狂ひ出さく家さへ身をも亡しあしき這回も人にそのまゝれて。倘その金を費しなバ還らんと欲するも遂にその家に入ることかなふまじ。吾儕も亦これまでの縁しと思ひて離別せん心を定めて此を去らんとおもひ。おん身も豫て知るごとく。斧柄ハ既に有身く帯となる程になりぬ。然れども其の心もとなく思ひて金を喪ひなバ。斧柄ハおん身の妻なれど生れん其の子も後々までおん身の子なることハなし。思ひて諺に那杜鵑が鶯の巣へ産て棄し。その子あるとも子で子にあらぬ類となりて悔からましよや。妻をも棄るとも慾の為に子を棄るを賢人とハ云べき歟。又只愚人とや云べき歟。みづから思ひ直して。吾儕もさして数にハ洩れねど柚の小夏に生別れせし心の歎ハ今日迄も。増りこそすれ忘れんや。ぞハ垂末なるにハあらずして垂に去せられ。母親の親甲斐もなきをいくハせずとも。人の才ある人ハその才の働く随に良からぬ行ひもする者の。よく和漢の經書果敢なきさうしの書ども草紙物語にも。忠臣孝子のうへを述て義理分明なる條を看れバ。誰も有理と心に信て。その身の及びがたきを悔しく思ふハ本然の善心にかへれども。又しばらく行ふとこのなきハ私慾のために天然の善心を滅却して一日も静ならねバと。或心学の先生のいられしを聞わたりしとて聴しとありし。定に教へぞ行ふべき。老なる親の意見をうけても理に暗けれバ腹を立。道理と思ふも無用とならべてを聴て。その難なる口の善言を好とおもひく。行ハずそのよしを思ふを只益にそと見るれしとも行ふべき定にあらずなり。酷も辛も昔味ひさとりつ。脱落なるおん身にハ冷笑なるべき談義に似れど。浴上りの贅言と思ふて腹をたて玉ひそ。ヨシヤ辯ハ傍痛きものなりとて。女子ハ長舌の譏を脱れざりけれども。

すとあまいわをたなへぬ花よりもれたるのりの人のうとの景
同
朱之介
あの子

出像第卅三
おちよ
十五

のゝぞ回已の後の支悔あらせじと思へども。拙工でも側観八目の助言を有理と信ぜざる。
ふるひあらべ後々ふたゝびたゞちに。倘舊病の復發とてみづからその身を懲めつゝ又ふたゝん
と欲するもこれ限りゆゑあるべんぎょう好てものいとまなくて。ぬてびらの五二併ら意見の的
中せんも當らざるべんぎょうの心ひとつふあり。斧柄も偽ろ沼て先周をあらんと言語
雄々しく説諭した。明辨塵譚ふ朱之介。胆を浅しん。理りをつゝ腹ふ立ても返さざる。
よりのあければ件の金を左右のくふ受戴ぜず。今ふそ慈愛教訓のごとく空ふ来ふ
べきれ心安く思ひれよ。江戸京師へ赴ぜず。沙金と布を買ひとるべし。旅路の准備も仕ぬ
ぎ。我も此ところ安られ。とふふ落葉ふ領ぜず。郷員ふ暦をそうしふ習ふ社日でよろばうと
下段ふあれば吉日。さられ許ヨの金を齎して。ひとつ遣らんふ心ひとるしこの四下の人を
傭ふ。俱しとあんも倒ふ心つひふあらんぞうん大和山城ふ都國ゆそこの上市ふ浪
速津まで十四五里ありとゆゑ浪速へ出ず京へ向くとも急ぐ二宿次るらんあ那地ふ

到て布を買取ふ。沙金の分しぬ。重驛馬よりも駄しとぞ遠ふ。とのぶ朱之介ふ
異議もなく仰おろふ。東西速ふ整ふ難て京ふ旦く逗留もとも六七日ふ過ぐ
ふ程なく帰郷つまらん今宵ふ寝ぬとふへば斧柄も共居ふ昏
報恩の為と思ひれ。這身ありての故ふ孝ふ仕へ。
あらしく仕へとのぶ落葉ふ文あるを。噫ふ益もなきれ親とふ子とふるもみな過世の定
業その子の為ふ親たるものふ骨を折ば誰ふ折ぬ。とのぶ
夫婦ふ頷ぬ。別を告て呉竹の。処へ入るも短夜や。夢ふ見ぬ押縁素の数寄ふ
起さず。秋分明ふそなるけり。然程ふ朱之介ふ斧柄ふ呼覚されて早飯を
べ果て。行装を整ふ高客の摸様ふ打扮て只一刀を帯るのみ。脚絆甲被ふ身拵
固め。那三百金を懐ふ。落葉斧柄ふ辞別。管佐立ぬくうち戴ぜて都路投て
起行け。送ふ別を惜ふ。逆旅千里の首途ふ。ねば。落葉斧柄ふ

つく盡さで出遣る。離合時あり。前知まぐさ。をを生涯の長別離とも豫こそ知るまろ
梅の盛過ぐる竹邑ふ北風寒に日向ぐ〳〵ふ置霜踏白く影ゑ寒まで目送る。却
説朱之介。その日頻りふ路を急ぎて日暮て浪速津ふ宿を投め次の日の黄昏
比ふ京の三條ゑ。客店ふ著よけ。京師ふ素より憚りあり。管領家邸の方ざま
人ふ知らるゝこのあらんとそ。影護く歩ふ朱之介ゑ故主ゑけ。香西元盛ゑ滅亡せ
よりそや五六年を歴て高國入道の武威衰へまぐく三好ふ攻悩さまく。伊勢路へ
没落ゑのゑ。世の風声ふ聞ゑ。その明年享禄四年ゑ心安〳〵とあるのゑ彼西殿ゑ
まぐふ怕れ。ぐくとその明の朝ゑ洛中を徧歴て沙金と唐布を買とゑふ東西ゑて
悉く輻輳せるとゑ。花洛ゑれども應仁以降。年々の兵火ふ荒れて良賈の類
轉まくれゑ。錦綉店ふも唐縣布ゑ。紀坊ふも三百両の沙金を藏弆ふゑけ。
朱之介ふ。その為体ゑ。且ゑれ且憂く両三日ふ洛外まで隈もなく渉獵ゑ。音ふ聞



あるとゑけれゑ困ゑ果て人ふ問ふ。ある人の誨ゑ。和泉の左界ゑ某の町ふ船積荷
三太とゑふ豪家ゑ。ふ家號ゑ浮宝屋と喚ゑ。泉州大内家ゑ由緒ゑ。
周防ゑ山口ふも枝店ゑ。ゑ〳〵来船の唐物ヨく引請て買ゑ賣ゑとゑふ。
沙金ふも亦那里ふゑ。紀左自由ゑ左界ふ。ゑ〳〵徵めゑと叮寧ゑ示せゑ。朱之介ゑ
歓び。次の日浪速まで引返へ。ゑ〳〵又人ふ問ふ。京ゑ〳〵ゑふ京ゑ〳〵ゑふ違ひ。又その次の日左
界ふ到り。那浮宝屋の市廛を尋ふ。店舗ゑ五間ゑ。過半ゑ細骨の構ふ
ゑ〳〵ふ厮五人。名居たりけ。登時朱之介ゑ件の小厮们ふ向ひ。坐ゑ〳〵ゑ
ゑ俺们ふ大和ゑ上市の坊賈ゑ。朱之介と喚ゑ。唐木綿一百反と沙金三百両
ぐゑ買ゑ。ゑ〳〵。今番京ふ赴行ふ那里ゑ兵火の為ふ荒ゑ。ゑ〳〵ふ然ゑ東西の
ゑ〳〵と敷花ゑ。ゑ〳〵ゑ人の誨ふ任せ。又この津まで。ゑ〳〵且唐縣ふ。
ゑふふふ厮们ゑ。ゑ〳〵ゑ這里ゑ找せゑ。ゑ〳〵ゑ応て上坐ふ推登ゑ。実ゑ曙戎徒長

途を労して茶を有めるに足る程ふの店の主管と覚ぼしく年齢五十ばかりなる婆奥の
ひとり出て来り朱之介に對面し七口誼を演じ却らう微かなる沙金の礼を目今
少そもつと易うり但唐緞布い船間ふ来れいその數速ふ揃ひ出でこの外勿論主人いなる此
周防なる枝店へ赴くり是則国守へ年始のあんれいの為并ては賀日の為ふ仕立の船
遠くに入津せんとおれ波上のなるれい遲速ふ測るべからざこの餘の高所要あり逗
留と數ひ出ふ他ふ宿と討めるも及べからず大和い平城丹波市五條ふ得意の販
子ヨヌくあり此の地へ擲販ふ来るふ毎ふ當家ふ逗留まあ然りとも帰郷と急ぎ且
ふ在所へかへりたるひ三四月の比来るべしとふ朱之介い沈吟し此ふ亦折の好り紀京ふ
るい東西數年と思ひ入り妻子ふ逢ひんとのみ知らざ長逗留せず妻
子のあるを思ふべし略費も意外ヨヌく没るべしなれども左まへ来り甲斐浦の名所と尋ぬく
欲しかり要意ふ任し両三百ふ尼會ふるべのこ宜く頼まるとふ主管いと易し



応じ一個の小厮を召て緯使と分付れば小厮い毎くふ誘とふ朱之介を
ふ立て居ふ仮ふあるの居宅へ倡道すけ登時朱之介い件の居宅ふ来るふ棟
尾ふ高く坐席幾間もあるとおりく工を盡しる豪家の家柱ふ壁ふ塗ぎ戸走り斜
るふも知られり有徳而容房ふ赴けば主翁の二男城藏と唱る壮佼奥ふ出て對
面し迭ふ名を告り来るを祝しけ當下朱之介い来意を報て且ふ寄宿の
熱ひを演る程ふ年十二四なる小厮ふ茶と有めるべし且し城藏ふ討めふ唐
緞布の折り船間ふ早の所要ふ立ぐふをのくべ出ぎれ本店の賀易船の遠くを
入津ふ遣れば且く逗留まへ勿論得意の商客達ふ質素ふ上目とふ宿
貸も亦謙ふ故ふ馳走ふつまりく且風爐ふ浴へ介後飯とまりく去べ主翁い他
郷の留守なるを某い尤ヨヌ教方ふ応對疎略失敬申しんの義充しの介と辞せ
ぬ口誼を演て辞し奥へ退けるを程ふ又那小厮ふ案内をし朱之介ふ浴

古今集 妹山背山後面の伏線
ながれては いもせ山の 中におつる よしの川の よしや世の中

湯させ。蘆莚の坐席をかへしなどして夕膳を羞めけり。この時春の日はや暮て夜中酒を薦むる塗折敷に取合したる撮殽は三種に過ず。茲姑の皮剥圓製と章魚の足の櫻煮などのみ。些小高く積れるは大和なる妹山と背山にも似るべく、金絲鰯は光りある中を流るる吉野川歟と見えども敵ならねば、酔まではえ喫べくもあらず。よしや世の中とひとりごちて三度傾けて茶を乞へば、小厮は立て浩処に年尚廿一個の男子うち咳して這里へ来て、容人御酒を召れしかと徒然にやおはするらん。お間とやせばやと、朱之介を微笑て、誰なるらんと何より問れば、かの馳走にと慳にへども献しまゐらせん、過しあへと応て勧る盃を件の男子は受て戴く程しもあらず、朱之介は取て銚子を引揚て酌んと来るを物体なしと遠しく推禁めて、噫うち置しつつ、小生は酌に仕らんと辞めて朱之介は為かたさぞ、独酌して献し甲斐なし。俺们に仕しつつと推禁するを押退けて膝を找めよるよと酌と見送り燈光の顔つくづくとうち見て成て、これ彼斉月一声とうけて。

和君は大哥にあらずや。然らば和殿は日高向氏、然は景市にはあらざるか。さなくば別後再會にてこそありけれと、俱に手を拍膝うち唱でも鉄ぞ限のもなりけり。當下景市は受たる盃を一吸に傾て、書して返しては相別れより傳れたるを一総に話すに、小弟は只一向に大哥は周防の山口に在ますとのみ聞しかば、這首に来つる初より出船入船の便りに跡て人に言告て在処を尋ねも這浮宝屋の枝店の鶴峯の城下にあれば、其処へも頼遣しく安否をしらまくほしけれども叔父公の名を忘れしかば、寛に便宜を得ずして過しなるを、周防の落も著ながら商旅のうはさにも母者は恙もなくわたらせしと聞へば朱之介は声を微めそのおもむきによるものなれば俺身今は大和の上市に在り。されども那里は旅宿の母親共侶に福富翁に辞別れて周防の山口へおもむき、起めて上市に在るよりの以来、竒量なる遭遇の苦楽は一朝に書しがたし。久風流く且喫べしと。さても盃をとりて揚て酌して三度傾けて酒息吹て献さ折ふし給侍の小厮が汲とりし煎茶の茶碗を塗手盆にのせ載て来るを景市急にとりて丁市よ、這阿客は俺素よりの知己なれば、姑く盃の敵

ゑ、ゆゑん和郎が且這飯の折敷をのこ退らと銚子を更てのそ来て措ね殺もこれ[illegible]
下へ何ぞめべ。庵温へのそ景市が徒くとろくすると告てヨヲくのと来よろくせぞと言ぐ。
厮いあくろろ夜食の折敷と銚子とを左右ふとりて退ろ更へ銚子ふ両三種の殺を
そう添てのそ来ふければ景市これを受とりそ和郎へ銚子媼るぞ又召ぶ。
あるひ追立たる蹟い竹馬の友垣や結纜の甲斐ありそ料らぶるふ寄胡桃炙鶏蛋の
ぎとこれ生殺い片牙ぞ。ろくゆづりそ飲同士の晩談ふ時を務へけ。然程ふ朱之介ゆゑ
母親ふ倶せられ。周防ふ赴そ。比の艱難叔父ふ遭ぞりしゆ。母親阿夏ふ旧識人ふ
よりそ求めそ陸奥へ携られ。あるそ。ゆゑの身い京師ふ出ぞ。ゆゑ仕へる。そのゆゑ
始より香西元盛ふ庇侍ぞ。時元盛ふ滅亡しそ。その身い辛く危窮を脱れ。ふぞ
叔父ふ房ふ環會い資を乞そ武蔵ふ赴く。扇谷朝良ふ仕へ。徒々の義よりそ。
迺主君の使とそ去々年の秋大和へ。六田川の邊ふ来ろ。如如来禅師ふ君命を達せ



とせふ障りそ這留ぐ。那造佛の施物の。鷹捉山ふ猟せ。死山猿を
射る。谷柄の岩葉の。安保筑前五郎夫婦の。件の禅師ふ主君より寄
進の沙金唐鯨布を喪い。支合の顛末を出母落葉の資ふ。沙金と唐布を買
んとそ。次安を窟へ金を預へ。京師へ投て来ふけれど。東西整ぬ引ゆ。這津へ来ろ終く
アまぞ。人ふ知さ反秘事も心考れ。景市ふ隠もべ。ゆゑ困
談数刻ふ及ぶる。言果て朱之介の。景市より對ひ。賢弟ふ何ぞの故ふ近江
ふいとぞ。這豪家ふ来く仕へる。福富の谷ふ行ぞ。死ぞ。黄金大きろ。
招堪せられ。欲凡作ふ。と問れ。景市四下をそ。然ぞ大力自屯倉ふ世を逝り。
谷ふも亦身ふ。ろたる。彼家大く衰へ果て。姨捨山の姨ふ。ゆゑ送られ。阿鍵の刀
自の。福富村ふ。ろ。大夫次谷ふの夏ふ就て。古今未曽有の奇談ふ。豆腐玉
へ。ろ。亦復後邊をそ。隔亮を引よ。そ耳く。大哥ぞ。五稔

朱之介

昔歳相歡
竹馬友
今宵再會
喪家狗
出像第卅四

あり。秋の比也。倉の大刀自いまさりあれば。その次の年大夫次翁。腰痛と湯治せんと。従者二名ばかりを伴て。信濃の筑摩なる温泉に赴き。早速出る程にその相宿に一個の金剛禅尼。年歳八十五六なるべし。一個の壁妾の廿歳可也と美しき。両個の女童を従へ。俱に日毎に浴湯をぞ。その所の大夫次翁と重紙一隔をへ堺とし。たれ〻ともいつとなくものひろけられのひろけて相譚ひ。他の為体を熟視るに。推量るに。盃盤器物の総て金銀なるべし。況那壁妾の艶妖なるに。ゆゑの衣通姫。小野小町の音に。のみならず。これ甚麽なるけんなるにか。今這美人の面影を。繪にかくとも筆も及びがたく。文を演るとも写し易からず。世に萬々金を積蔵。優るものくるにもあらねど。誰か這数らく。ものを及ぶべきなるべし。過世の果報なりて。今世に得る自由なるべきまはしられと。思ひて。首一日又江湖上の。譚ひける語次に。大夫次のいはく。尊師。作麽何州の先達ぞ。徒らに富貴を極めるひる。携りのし器物さへ皆共自ら。無数ら。ぶらぶらの跡と。



知らく欲うひるれとふに那人微笑て答道。京師に程遠からぬ北白川の山里に有。験観主古人前道人と唱る。先祖に渡唐の人。吉備大臣安倍仲麿弘法大師。その他も黄白に富るのみとふて。大夫次訝りて古より。吉備大臣安倍仲麿弘法大師。その他も渡唐の人。賢人名僧多けれども。帰朝の後に子々孫々まで金銀に富むことを。あるいは抑假金煉銀といふ。法にかはりて。願ひ教へのみと。又他のものに請問ふを。古人前は聴ぶ頭を掉て。その我は一子相伝。他人の為に口外ぜず。問せるは益なしと。大夫次推返して。その談ずるべれども。花拙の野の愚人。老実の一稱せらる。秘法を教諭ずるとも。人に伝るのみあらじ。その交易は何れ彼れ所望の東西に進せん程に。示させ給へと。頻りに問ひ。已ずりければ。古人前道人。又云ふ。釋尼。領て族宿ぞ。うちとけられて。友垣結び。爺の願望深信堅固の人と。共に今ひるに。默止ぞ。勿論。類の秘方ありあるべし。必外言漏らしぬ。その一方は。安上九還丹と名つけたる。是則唐山

者道士丹容の傳法あり。唱先祖渡唐の日傳授せられし神訣ハ且その法に遵ひて。十両の金を煉取らんと欲するときハ。一両の真金をもてこれを母金となすなり。かくて又九両の黄銅と汞とを相加へ別に又某種を加へて稍久しく煉るときハその黄銅と汞と化して真金となるといふ。まづるに一銀を煉るもその法これと相同じ。疑しくハ唱法術を眼前に見せまゐらすべしとて且くとてやうやく鞴て鑄鍋をとり出して粟粒ばかりの金を入れ且更に又黄銅と汞某種を相加へて法を行ひ火に被く煉ること凡半晌ばかり火を退けて盞をとれバ果して黄銅も汞も化して金になりたりける。誰か知るべき此はこれ縮金の法にして一両の黄金を縮めて粟粒ばかりにせし黄銅汞某種を加へて稍久しく煉るときハその黄銅と汞ハ盡く消失て那縮金のみ甦てもと大きくなれるを便是騙賊の術にて。その黄金の殖るにあらず形の大きくなれるなりしを愚俗ハ欺かれて実に金の殖ることを知ざるものあることも希なり。大丈次もその類にて憑る奇特をみてより且呆れ且感じて只管に感嘆して合点

なからず舌人愈に對ひて。秘法寔に至妙なれども慥にハ瑣細の金をもてその随に数ヨりて煉取るものなるぞや。と問へバ道人頷きて。その母金の多寡によりてそのかずくも自由なりといふに大夫次鉄びて。老拙優なるにあらねど家にハ些ばかりの貯禄あり。ある限りをもて母金とせば願ふハ志より賀を枉て俺宿所にて九還丹の修法を行ひ給ひなバ是莫大の高恩なり尊師黄白に富たまへども旅中なれバ別に東西も叱当にふべきも辛ひなるべしといひて遽しく懐中より金十[illegible]貽出して扇に載て贈りしを舌人道人辞ひて受ず。貪道寔に這東西ヨりの是ハ[illegible]にもとむるにあらずとのもとめ辞ふて勧解るが如く納めまへとてかへて頻りに薦めて果しまうまが舌人愈ゆく金を受て扇を且宜て返しとゆふ。翁の請待黙止がたかるべし則室と女童们を且白川へ率てかまへて別に我宅へ赴くべしとの従ぞその便宜としとゆ大丈次ハ又あへて宜ふよしハ理りなれども老人の性急にて異日の再会ハ不楽しかるべし。寔に田舎の茅屋なれども屋敷なりハ亭広にて離坐席もあへバお宿を仕るに便宜よし脚小遅を俘ふて

ちより光臨ありぬべし。三七の湯治あと。老拙が庵所へ愈〻尊師の隨意ならば伴なるべ。
その義を願ひたてまつると辭を盡し意を演べ。直倡ふ誘引なれば古人の前道人沈吟して久負
道宿所ふ母親あり候ひ。ひとびとくゆられんと。貌望まるふ切なれば枉て同道致すべし。ちなみに大夫
次の欲ひ。あらぬ翌の這地を去て。齊一帰路ふ赴くべし。とまた約束をなる程ふ古人の壁
妾を引合へ。涙の小槌と呼做さるべし。且く老宅ふ逗留中に尼會ふ逗留ふ那女童
們の一人の打出一人の丁児と喚做さる。あん目あるべしと。ふ大夫次の惚〻と。小槌をもつて叩
寧ふ向後を契へ遽へ。担ふの准備をまべられと。其身の坐席へ退ぞけ。有徳面の話
明大夫次の件の小槌と。女童をも行轎ふ乗へ。どの餘の物の馬ふ駄へ。古人前道人と
相俱ふ従者二名を隨へ。宿を出て近江の福富村へ投へ急ぎけり。畢竟大夫次の。舌
命を宿所ふ伴ふ。又甚麽ふ説話あるべしと次の巻ふ解分ると聽給へ。

近世説美少年録第三輯巻之三終